

そ だ おさむ

祖 田 修 (年齢68歳) (昭和14年10月11日生)

(住所) 〒910-0003 福井県福井市松本2-37-3-102 (電話0776-26-1159)
(略歴) 昭和38年3月 京都大学農学部農林経済学科卒業
昭和38年4月 農林省経済局金融課勤務
昭和40年4月 京都大学農学部助手
昭和48年4月 竜谷大学経済学部助教授(この間ドイツ留学)
昭和59年4月 京都大学農学部助教授
平成2年5月 京都大学大学院農学研究科教授
平成15年4月 京都大学名誉教授、福井県立大学経済経営学研究科教授
平成16年4月 福井県立大学学長

研究業績の題名： 農学原論の確立

業績紹介

農林水産業がますます困難な状況に置かれている現代にあって、農学に求められるものは何か。言い換えれば、今日の農学はいかなる基本的性格を持ち、何を価値目標とすべきであるのか。このテーマを一貫して追究してきた祖田修氏の到達点が『農学原論』(2000年)である。

祖田氏によれば、農学は単なる応用科学にとどまらず、自然科学と人間科学の統合されたところに成立する実証科学であり、積極的な価値目標を掲げてその実現を目指す実践的な科学でなければならない。第二次大戦後、日本の農学が研究対象としてきた主要な価値は、経済社会の変化に対応して、生存水準上の、次いで生活水準上の「経済価値」、生命と環境のための「生態環境価値」、生活と社会を重視する「生活価値」の3段階に分けられる。は日本に農学原論を初めて根付かせた柏祐賢氏の提起したもので、「生産の農学」と呼ぶことができる。また及びは柏氏に続く世代に当たる坂本慶一氏によるもので、「生の農学」というべきものである。

祖田氏は両氏の足跡を踏まえつつ、現代の農学に与えられた課題は以上3つの価値を調和的に統合する「総合的価値」の実現にあるとする。3つの価値はしばしばトレードオフの関係に陥るが、これを「地域」という場において調和的に実現することこそ農学の新しい価値目標でなくてはならないとし、そのような立場を「場の農学」と名付けた。また農村調査から理論化した行為的認識という概念と、デューイの探究の論理を足掛りとし、場の農学の方法を提示した。

「場の農学」における地域とは、具体的には各生活世界を範囲とする農村にほかならない。それは生産の場であり、生態環境のユニットとしての場であり、さらに生活の場でもある。集落構造、協同性などを特徴とする地縁社会だった農村は、今後、情報ネットワークの普及に伴って「開放性地縁社会」に再編されることが展望される。しかし、持続的農村地域の形成は1個の農村単独では不可能であり、中小都市との一体化が欠かせないというのが、祖田氏による「場の農学」のもう1つの核心である。中小都市との結合によって農村は農外就業の場を確保するとともに、生活上の利便や娯楽の機会を満たすことができ、それによって地域の持続性が実現するのである。こうした「農村と都市の結合」の理論は、ヨーロッパとりわけドイツの地域社会研究の長年にわたる積み重ねを基に構築された。

祖田氏はさらに同書の末尾において、発展途上国を視野に入れた研究の必要性を強調し、農学の新たな展開方向を示唆した。この問題提起は今日、多くの研究者によって深められつつある。

同書は2003年に中国語訳、2006年に英語訳がそれぞれ出版され、国際的にも高い評価を得ている。

(岸康彦選考委員記)

過去における主な業績

1. 前田正名 (人物叢書165号) 吉川弘文館刊 1973
2. 地方産業の思想と運動 - 前田正名を中心にして、ミネルヴァ書房刊 1980
3. 「西ドイツの地域計画 - 都市と農村の統合 - 」大明堂刊 1984
4. 「コメを考える」 岩波新書57 岩波書店刊 1989
5. 都市と農村の結合 - 西ドイツの地域計画・増補版、大明堂刊 1997
6. 「農学原論」岩波書店刊 2000
7. Philosophy of Agricultural Science, Trans Pacific Press, Melbourne, 2006

過去に受けた主な賞

- 2002年 地域農林経済学会・学会賞
1996年 地域農林経済学会・特別賞